

## 小児の食欲特性の遺伝的側面と肥満

いずみ 泉                      のぶ お 夫

キーワード：小児，肥満，食事行動質問紙，食欲特性 (appetitive traits)，遺伝性

### 要 旨

食物環境の変化により小児の肥満はここ数十年間に急増したが，なお肥満の程度には大きな個人差があり，比較的が高い（概ね 2/3）遺伝性を認める。小児の食欲特性を把握する手段として 2 歳から 13 歳位用の the Children's Eating Behaviour Questionnaire (CEBQ) と，生後 3 か月未満用の the Baby Eating Behaviour Questionnaire (BEBQ) が多用される。"食物の求め" を示す「食物反応性」などと，"食物の遠のけ" を示す「満腹反応性」などの項目があるが，肥満度の少なくとも一部は，これらを介して遺伝性を発揮する。早期の食欲特性の評価は後の肥満の高リスク児の判別に役立つ。

高リスク児の食物反応性を助長せず，満腹反応性を損なわない，家庭の食事環境を育む方策を知る必要がある。

### はじめに

特に先進諸国での肥満児のここ数十年間での顕著な増加は「遺伝子の変化」では説明できない。原因は安価で美味しく高エネルギー濃度の食品が容易に入手可能になった食事環境や，sedentary になった生活スタイルにあることは疑いない。

しかし，現代の食事環境下にも肥満児も痩せた児もおり，大きな個人差がある。乳児期から 2～3 歳までに過剰な体重増加を示す児は，就学期，思春期の肥満の高リスク児であるが<sup>1,2)</sup>，高リスク

児は如何に生ずるか。

原因を生来の食欲の旺盛さなどの個人差に求める研究と<sup>3,4)</sup>，家庭内食事環境の差異に求める研究が行われてきた<sup>5,6)</sup>。肥満は BMI の分布の遺伝性と環境の両因子が極度に作用した結果とする双生児研究もある<sup>7)</sup>。

前者から肥満の高リスク児を判別し，後者が示す家庭環境因子を改善できる可能性がある。小児期の食欲特性に関して調べた。

### I. 乳幼児の熱量摂取と体重増加

#### 1. エネルギー均衡

肥満は熱量摂取が消費を上回る状態が続くことで生ずるが，生後 12 か月，24 か月の間の過剰な体

Nobuo IZUMI

出雲市立総合医療センター小児科

連絡先：〒613-0003 出雲市灘分町613

出雲市立総合医療センター小児科